
山頂の事件

よつつん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山頂の事件

【Nコード】

N6480A

【作者名】

よつつん

【あらすじ】

迷推理をした後に必ず名推理をする変な名探偵尾島健也の息子の尾島健次が宿泊学習に行った。するとそこで誘拐事件がおきた。さらに宝探しまで加わってきた。尾島健次はお父さんのいない中少年探偵団を作り事件解決に挑む。

第一話 序章（前書き）

小五の僕が書いたのでおかしい点があるかもしれませんが気にしないでください。

第一話 序章

明日は絶対楽しい日になるー。なぜかという今日は、初めての森林学校だー・・・というわけで今から始まる物語はその初めての森林学校で起きたことです。

一日目寝ているときに先生の見張りがついている場所で誘拐が起きた。

そして二日目にみつけた不思議な紙と書かれたこと。

そして、幽霊。さらに、健也と警察の関係と間でおきた事件と人間消失事件とそれにかかわってくる男の

メインの一つの事件＋宝探しの謎一つ＋オカルト＋後日起きた事件二つ＋謎の男の推理小説です。

まずは物語を始める前に、登場人物の紹介をしましょう。

まずは語り手である僕、姓は男（あつ、名前を見ればわかるか）の尾島健次です・・・うーんあまり

僕って特徴ないなあひとつあるとすればパズルが得意ぐらいかなあ。まあこれから話を進めていくわけだからそれを見て性格などを考えて下さい。（ちなみに茶木茶木小学校の四年生です。）

次は主人公で姓は男（「だからわかるって」でツツコミはやめて下さいね）の尾島健也、

僕のお父さんです。・・・うん！これはいっぱいありそうだ。

まず職業は新聞記者で迷・名探偵（この意味は後で説明します）。性格は、まず目立ちたがり屋で自信過剰のお父さんです。

後は、お父さんはある一部の上司の言うことなら何でも聞いちゃう。だけど、自分が認めない人の言うことは、絶対に上司でもいうことを聞かない。

今、僕が知っている、言うことを聞く上司さんは一郎さんとお父さんの幼なじみの正一さんだ。

次に言うと、さっき言った迷・名探偵という言葉の意味は迷探偵で

もあるし名探偵でもあるということだ。

つまり、お父さんは絶対最初に迷が何個かつく推理をする。

つまり迷・迷推理とか迷・迷・迷・迷推理とかだ。

そのときあきれて変えられそうになると必ず何かひらめく。

それはもし、一回目が迷推理か迷・迷推理だったら名推理だ。

もしそれ以上だったら迷がひとつづつなくなっていく、

つまり失敗は成功の元というけどひとつの事件に必ず一回は間違える、おかしなお父さんなんだ。これでお父さんの紹介は終わり……かな？

とにかく、次は僕のお母さんで姓は女の尾島昌子だかひしんこです。

これもあまりないけど、あまりこの物語には出ませんからちょっと説明します。

えーお母さんはパズル好きで、よく夕食のときなどにクイズを出します。

僕のパズル好きはそこで教えてもらっているからだ。

後はさっきも言ったとおり出ないのでかかないで、あと出るのは、

僕と少年探偵団を作る次郎・角田・真太・正太郎と警部補の健也の幼なじみの真京太郎と

クラスメイト・先生や警察のその他大勢です。（ああ、みんながその他大勢って何だよ！っていきそう。）

とにかく登場人物紹介は終わったのでこれから物語を始めます。

第一話 序章（後書き）

面白かったですか？

第二話 事件が始まるまでの時間

ふぁーあ、すっげー眠いよ。昨日、今日が森林学校って言うことでうかれちゃった。

まあ重い荷物を持てばきつと眠気も覚めるだろう。

なんたつて今日は初めての森林学校の四泊五日の内の一日目なんだから、荷物も多いんだ。

とにかく今日起きたらお母さんが弁当を作っておいてくれるだろう。思っていた。

でも甘かった、おにぎりどころか起きていなかったのだ。

寝坊をしているお父さんを横目でにらみながら（どうしてにらんだかは後で言う）お母さんを起こしにいった。

学校に行かなきゃ行けない時間は七時、今は六時なので時間がない。僕はお母さんを起こすと、またもお父さんを横目でにらみながら、簡単なものを作っていく。

たまごやき・鶏肉・おにぎり・デザートのイチゴなどをどんどん入れてく。

何とかできてできるだけつめこむとリュックの中に入れて家から出て行った。

すると、実は簡単なものを作っていたので、たった三十分でできていたんです。

つまり、急いで出たので三十分ごろだ。そして急いで走っていったら五分ぐらいでつくことになる。

そして、三十五分に着いたら門は閉まっていた。そして、時間を間違えたのかと考えながら歩いてうちに帰る。

一時間早く来ちゃったのかな？
とか

まさか、明日遠足の日じゃないよね？

とかを考えながら歩いて帰ると家への道は十五分、うちに着いたら

五十分ぐらいだった。

するとお母さんがおきてきて

「あら、おきていたの。じゃあさ、ちょっと朝ごはん作ってくれない。」

もし作ってくれないのなら今年はもうゲームも漫画も本も買わないしお年玉も渡さないからね！」

ほとんど脅迫じゃないか。

二つ目のから鋭くなったお母さんの口調にこう思った僕は頭を抱えなくなったが、

しょうがなく朝ごはんのおにぎりを作ってあげた僕もひとつを急いで食って、時間を確認する。

なんともう五十五分になっていた。お母さんが

「いってらしゃい。。」

といったのを、いってきますとも返さずに、急いで出て行った。

そして学校に着くともうすでにみんな着いていてバスに乗る準備をしていた。

何とかバスが出るには間に合ったが、茶木茶木小学校は時間に厳しく、

クラスの中で一番来るのが遅かったものは、遅刻マンなどという名前をつけられて、

しかも三日連続で遅刻マンになると遅刻大王になるという伝統があるだから僕たちはこんな伝統いらねえだろ。

いつも思っている。つまりぼくはその遅刻マンになってしまったわけだ。

幸いにも今までいつも早く来ていたので遅刻大王にはならなかったが、

いつも早く来ていたのでみんなにずっとひやかされた。とにかくバスは出発して各班のレクが始まった。

茶木茶木小学校ではひとつの学年に二つか三つクラスがある。

四年生は三クラスで、班は十班まであって、一班から三班が一組で

四班から七班までが二組で

一番多いのが七班から十班までの三組だ。

一組と二組は一つの班の人数が六人ぐらいだけど三組は一つの班の人数が十人もいる。僕は三組の八班だ。

バスは全部で四台あって一号車は一班の男と四班と七班だ。

二号車は一班の女と五班と八班だ。僕はこのバスに乗っている。

三号車は二班と六班と九班だ。最後に四号車は三班と七班と十班だ。バスは小型だけど一号車と二号車はけっこうあいている。

だけど三号車と四号車はぎゅうぎゅうでレクどころじゃなくなる。

僕も三年のときの遠足で同じようにバスに乗ったけど運悪く

三号車でマイクを使って話し始めようとするとなんかがぎゅうぎゅうづめになって、

なぞなぞを出すところは書いてある答えを見られたりして大変だった。

しかも、一息つこうと背伸びをすると立っていた女の子のおしりを触ってしまった

「痴漢！」

て叫ばれてしかも思いつきりけられて大騒動になった。

僕はその大騒動のときおしりを触った子の横にいて女の子を触った子に向かってやったけりが、

横にいたこの僕に思いつきり当たった。

しかもバーのようなところでほおづえをかいていたので思いつきり頭にぶつかった。

さらに、不幸は重なり、その子は空手を習っていて有段者だったのだ。

結果、僕は覚えてないけれどそのままその場で気絶したらしい。

しかも、そのとき僕は一週間、記憶喪失だった。

僕は、一週間後、見舞いに来たけてきた子がこう言って頭をたたいてきた。

「まあそんなバカみたいな顔すんなよ。」

そして、頭がただでさえくらくらしていたのに頭をいきなりたたかれたので僕はまた気を失った。

そして五時間後、ぼくはやつと意識をとりもどして記憶も取り戻したらしい。

なので、バスの三号車と四号車と、空手の有段者の女の子は僕の天敵になった。

だからどうしても七班か八班になりたかった。今年は何とかなれてよかったけど油断せずに、

来年からもどんな人と一緒になっても七班か八班になりたいと思っている（でも空手の有段者の女の人はやっぱりヤダ！）。

では暇つぶしにレクでたなぞなぞを十連発（答えは泊まる場所へついてから！

1 熱があるときは走り回って働いて熱がないと休むものって何だろう

2 突然おなかを壊したとき病院まで何秒かかるでしょう。

3 笑いながらあめを食べたときあめは何個たべたでしょう。

4 えんぴつを使わずに目をつぶって書いたものなんだろう。

5 顔の真ん中に「つ」の字をつけて泳いでいる魚ってなーんだ。

6 ワニ＋ワニは何だろう

7 絵を書いて見せたらひらがなの「え」をかいて。とつけられた。さてどういう意味だろう？

8 おじぎを何回もして頭をぶつけると役に立つものなーんだ。

9 柿の木を見るとおながが減りみかんの木を見るとおなががいっぱいになった。なぜ？

10 毎朝もひるも夜も追いかけてこをしているのっぽとちびのものってなあに。

そして、今日お父さんをにらみつけた理由とはじつは、今日お父さんが森林学校に来ることになってるからだ。

まず最初はお父さんのわがままな言葉から始まった。僕が森林学校に行くということをお父さんに言ったら

「えー、そんなこと早く何で言ってくれなかったの！いくよ！先生たちには取材ということで一緒に行くよ！」

とお父さんが言い始めたのだ。

こういうことはわかっていた。お父さんは大の山好きだ。こんなことを言われたら、何をしてでもいくに違いない。

ただどあえて言ったのは絶対こないと思ったからだ。

パパは上司の言うことなら何でも聞くので上司の一郎さんに頼んでみんなが行ってもいいといわないように上司のみんなに頼んでもらうんだ。そういうことで一度はほつと安心したんだけど、甘かった。ある日、上司の一郎さんがうちに来て今度の取材の打ち合わせに来た。そして最初は大丈夫だと思って自分の部屋でゲームをして遊んでいた。

すると、お父さんに呼ばれたので歩きながら客間に向かって行くとお父さんがこんなことを話していた。

「実は、今度息子が森林学校に行くんですよ。それについていってそれでその滝川荘というところに

取材ということで行きたいので、時間をくれませんか。」

そして、お父さんが僕に気づいた。

「あつ来た来た、おい健次！今一郎さんに森林学校のことお話しているんだ。」

僕は、それを聞いてまたびっくりして一郎さんを見た。一郎さんは「それはだめだよ、今度の森林学校じゃなくなつて家のすぐ近くにあるんだからいつでもいけるだろ！」

と怒つたような口調で言ってくれた。でも、珍しくお父さんは一郎さんに反対して

「何言っているんですか！今の季節は取材で忙しいのでまったく山にいけないですよ。」

だから今の季節のあの山入ったことがないんです。」

と言った。一郎さんも負けずに言い返す。

が。」

確かにそのとおりだ。しかしお父さんもあきらめない結局負けたのは一郎さんだった。

一郎さんは、取材を許可してぼくに手を合わせて誤りながら会社に帰っていった。

それで僕は、がっかりしながら今日を迎えた。しかしお父さんは寝坊して、

どうやらみんなについて来ていないみたいだ。

それで僕はバスのことと、お父さんのことに喜びながらとうとう泊まる場所滝川荘についたのだった。

答え

1 アイロン

2 9秒(急病)

3 二個

4 あぐら

5 かつお

6 わし(わ2+わ2=わ4)

7 まるで絵になってない。(で「え」じゃなくなったから)

8 とんかち

9 気(木)が変わったから。

10 時計の針

第三話　そして第一の事件

とうとう滝川荘に着いた。パラパラとしおりをめくる。たしか、最初は集合写真をとって掃除をするはずだ。

しおりを見てみるとそのとおりだった。それで、まずは集合写真を撮った。

そして、自分の部屋にいった。班で男と女に分かれる。つまり部屋は二十室ある訳です。

ちなみに僕は八号室です。ついでに言うと一号室から十号室が男子で十号室から二十号室が女子の部屋というわけだ。

同じ部屋の男子は次郎、真太、正太郎、角太君たちで、実は次郎君は一郎さんの子供だ。

僕の名前はお父さん（そういえばどうしているんだろう）が健也だから、

お父さんの次に健康になるようにと健次だけど、

次郎君も僕と同じように一郎さんの次に生まれたから次郎になったらしい。

じゃあ弟ができたらどうという名前にするつもりなんだろう。ということも考えているらしい。

ほかの子を紹介すると、真太は影の薄い男の子だ。

勉強はよくできるし行動的な男の子んだけどなぜか影が薄い。

たぶん運動会のときでもあまり活躍しないし体育もあまりできないし無口なのでみんな気付かないんだろう。

しかし、僕が前お母さんに出題されたパズルを真太君に出題したら簡単に、

すらすらと解いてしまった。しかも全部正解だ。今日のバスの中でもパズルの答えを言われる前に全部僕に教えてくれた。

僕もパズルが好きで簡単なのはすぐ解けるけど僕も難しいと思った問題さえも楽に解いていた。

本人はあまり考えてないというのが、パツとひらめくらしい。

それで、パズルがすごいということが分かって班に入れることを僕が強く希望したので今回は同じ班になれた。

最初から、真太君はみんなに嫌われてないというかすかれているので誰も反対しなかった

もちろん、なぞなぞやクイズを僕が考えてきてみんなに試しに出した時一番初めに答えたのは真太君だ。

次は正太郎君、テストの点が悪いけど運動に関してはすごすぎるらしい。

四年で陸上部に入ったとたんに部で一位になったらしい。

そして、六年になったらもう全国大会にいけるとうわさされている。しかし、正太郎は“伝説の遅刻大王”と言う異名がつくほど遅刻が多い。

そのことは今では学校の七不思議にされるほどだ。ちなみに真太とは、

真太が頭がいいので勉強のコツを正太郎におしえてあげる代わりに運動のこつを教えていて、つまり教えあっているらしい。

それをやっているうちに仲良くなって真太君に紹介されて仲がよくなった。

それで、班を決めるとき最初に正太郎を見つけた。

最後に角太だ。角太は、あまり目立たない子で同じようなので真太に声をかけると気があつて、

仲良くなったらしい。僕には正太郎君と同じように最近知り合つて一緒にになりたいといってきたのは真太だった。

だけど意外と角太は肝がすわっている、次郎も肝がすわった方だが、角太も同じくらい肝がすわっている。

ちなみに班になろうと声をかけた順は次郎・正太郎・角太・真太の順だ。

真太を一番初めに見つけようと思ったけど影が薄くてよく分からなかった。

けれど、角太と一緒にいたので最後にすぐ見つかった。
とにかく、みんなの荷物を部屋の隅に置いて各場所にみんなは行った。

いくところは組ごとに分かれていて、一組は各部屋、二組は食堂、三組は台所の掃除をする、

僕達は三組なので台所だ、でもまだあつて三日にご飯をみんなで作るときご飯とカレーと肉じゃがに

分かれて作るのでご飯とカレーと肉じゃがの台所がある。なので僕達も三つのグループに分けた。

でも、これが面倒だった。グーパーはできないからグーチヨキパーでやった。

でもにんずうがおおくて三人組でやることになった。

それで、やろうとしたけどぜんぜんできない。

人数は、三十人なのでちょうど十人ずつにしたいんだけど、まったくできない。

しょうがなく出席番号で一から十までがカレー、十一から二十までがご飯、

二十一から三十までが肉じゃがの台所をやることにした。僕は七番で、カレーだ。

他にいる僕の知りあいは、次郎君と真太君だ。

ぼくたちは、三人で仲良くカレーを作る台所をきれいにした。

そして、最後になべを整理しようとする、いきなり誰かに肩がぶつかった。そしてその子に怒ろうとした。

「痛いじゃないか あっ！」

怒って、文句を言いながらぶつかってきた子を見て驚いた。なんと僕の好きな小島京子ちゃんだったのだ。

この子は、幼稚園のころからいつも一緒に、僕の初恋の人になった。しかも京子ちゃんは、小島直哉こしまなおや 校長先生の娘だ。

それに、美人で、頭もよくて足も速くてみんなのアイドルだ。

だけど、小島京子ちゃんは背が低い。背の順では一番前にいつもいる。

それに、この前保健体育のとき二十歳になるまでの平均身長がのつていて、調べてみたら七歳だった。

ということは身長が小学一年生か二年生ぐらいの平均だ。

だから、みんなあまり集まったりはしない。けれど、僕はあまり気にしていない。

なぜなら、僕の平均身長は八歳ぐらいだからだ。それに、じつは京子ちゃんは僕と同じ班だ。

だから、僕は宿泊学習の内に京子ちゃんの気を引こうと思っている。まあそれは置いといて、多分今そのまま怒ったら京子ちゃんの気を引けないだろう、

それどころか、マイナスポイントが入ってしまう。僕は急いで京子ちゃんが

「あつ、すいません。ごめんなさい。」。と誤っているのをさえぎって

「別にいいよ。それに、今は横をよく見てなかった僕が悪いんだし、気にしなくていいよ!」

と軽く誤った。よし!今ので、僕のことをこっちのが悪いのにこっちのせいじゃなくて、

僕のせいだといってくれる男ということで、いいポイントが入っただろう。周りから

「ヒューヒュー」

と声ができるけど気にせずにはじめようとしたけど、やっぱり気になつて振り向いて怒ろうとした時

ちょうどいい具合に先生が来たのでみんな自分がやっていることに戻っていく。とりあえず京子ちゃんに

「じゃ、一緒に整理しようか。」

と言った。京子ちゃんもその気だったようで、すぐうなずいて、一緒になべの整理を始めた。掃

除は大変だったけど何とか京子ちゃんにポイントが入ったのでよしとするか。

今日の予定はこれで終わったので、続いてお風呂だ。一組 二組 三組の順に男から入るので、僕たちは三番目だ。

とりあえず、今日の予定はこれで終わりなので一時間ほど自由時間になる。

自由時間といっても布団を敷かないといけないので三十分ほど時間を使うけどとにかく自由時間だ。

急いで布団を敷き始める。僕はあまりトイレに行かないので一番窓に近い場所になることになった。

しかしひとつの班に二つの部屋があるので一つの部屋が七畳半くらいだ。

だから、布団とか枕とかリュックサックとか荷物を置く場所を入れると結構きつ着呢なので、

三つぐらいしか布団がしけない。だから布団と布団の間にまたがって寝る人が二人いることになる。

それで、そのことでもめた。間にいると寝相が悪い人は、隣にいる人をけったりするのであまり

被害が出ない一番はじにいくことになる。僕は、

「僕、いつも朝起きたら転がってベッドから落ちて十メートルほど動いているし、

いつも僕はあまりトイレに行かないからトイレに行こうとして人を踏まないから僕ははじの方がいいよ。

だから、僕は窓のほうにいたほうがいいよ。」

という言い分を変えないで何とかはじになった。

もう一つのはじはすごい争奪戦になった。

次郎や真太や正太郎がいつもトイレに行くのでドアのほうのはじだ！と言いつつ合った。

結局じゃんけんになり最後は正太郎がはじになった。

後の人もじゃんけんで決め、窓際から、僕、真太、次郎、角太、正

太郎の順になった。

僕が、一番窓際になりたかった理由はいつも僕は窓際のところに沿って寝ているからだ。

いつもホテルに行ったとき真ん中に寝るといつの間にかベッドから落ちていたこともあった。

しかも、落ちた場所はいつも壁がある場所だし、いつも寝ている場所とちよつとも違ふとなんか寝られない時もある。

それで、ぼくが真ん中とか間に行ったら、窓際の人にすごく迷惑がかかるし、よく寝られないと思ったからだ。

そして、夕食を食堂で食べることになった。うちから持ってきた弁当を食べることになっているので、

僕も家で作った弁当を食べた。簡単なもので作ったので、みんなのものにはかなわなかったけど、一応おいしかった。

そして、就寝の時間になった九時になって、とりあえず今日はなんとかぐっすりと寝られた。

そして僕たちは何の物音も聞かぬままどんどん深い眠りについていったのだった。

第四話　そして第一の事件<2>（前書き）

とつとつ事件がおきます。

第四話　そして第一の事件＜2＞

次の日、僕は六時十五分に起きた。六時半に起床なので何とか時間は過ぎなかつたらしい。安心してドアのほうを見ると、やけに静かだ。僕の隣で真太のいびきが聞こえるので、わざとけりながらドアのほうへ向かった。途中で

「うわっ、なっなんだ。」

という声が聞こえたけど無視して上履きを確認する。すると、僕と真太の上履きしか置いてない。

事件だ！僕は直感的にそう思った。真太も後から

「どうしたんだよ、おい健次！あれ、上履きの数がおかしくないか？それにみんなは？」

さすが真太だ。よく分かった。たぶん事件かも思っているんだろう。

「まさか全員誘拐したのか？でも、なんで僕たちは誘拐しないんだ？」

と自問自答している。僕は真太と僕の上履きをそろえると「よし、ワトソン君事件を確かめにいくぞ！」

と腕をつかんで引つ張った。しょうがなく、行く気になつたらしい靴を履いてドアを開けた。ドアを開けると女の部屋のほうから声が聞こえてくる。僕は

「なんだよ。なんで僕がワトソンになるんだよ。ブツブツ。」

と言っている、真太をそのまま引つ張つて声が聞こえる場所へ行く。人ごみの中に次郎と角田と正太郎がいたので話しかける。

「おい！何が起こつたんだ？」

「なんでも十八号室で人がいなくなつたらしいんだ。」

そう次郎が答えてくれた。同じ班の人がいなくなつたから怖がっているのか顔が青い。よく見ると角田も顔が青い。僕は

まさか京子ちゃんじゃないよな。

という不安を胸にしながら十八号室に向かう。人ごみがざわめいている。

小島京子ちゃんて言う子がいなくなっただって。という声がざわめきから聞こえてくる。僕の不安が当たってしまった。

僕はその場に倒れそうになる。そこをちょうどワトソン君（ああ真太だった）が支えてくれた。

とりあえず、間を通って前に進んでいく。

こういうときチビだと便利だ。途中で真太を残して十八号室の中へ向かう。

中では京子ちゃんと仲のよかった、班の子が泣いている。その隣で先生があやしなから、

話を聞いている。その隣で先生たちが話している。

「おかしいなあ、入り口は先生が見張っていたし裏口もないしトイレの窓もとてもじゃないけど通れないし

手も届かないよなあ。」

「もしかしたら、天井裏を通ったのかもよ。あそこは開くようになってるし、

布団の上に乗ればチビでも届くよ。それに、あの子なら天井裏を通れると思うし。」

と、布団の上の天井を指差している。だけどほかの先生がだめだしをする。

「第一、なんで人目を避けてわざわざ天井裏を通ってまで、外に行く必要があるの。」

確かにそのとおりだ。いったいなんで人目をさけていたんだ？その時さつき真太が言っていた言葉が思い浮かんだ。

「まさか全員誘拐されたのか？」

まさか、本当に京子ちゃんが誘拐されたのか？と考えながらみんなのところに戻る。

戻ると、角田と次郎と真太と正太郎が待っていた。

四人に今見てきたことを話し、今思っていたことをみんなに話す。みんなさまざまな反応をした。次郎は

「まさか……ありえないよ。」

顔が青いので、おびえながら離しているように見える。角田も同じように

「そうだよ……次郎の言うとおりだ。」

といったきた。正太郎も

「そうだ！絶対に誘拐なんてありえるはずないだろ。先生が言ったとおり誘拐されたってどうやって逃げるんだよ。」

まさか幽霊がやったなんていうわけじゃないだろ。」

『幽霊』という言葉が出たとき、角田と次郎がびくつと震えた……
・ ような気がした。

でも、真太のこの言葉を聴いて、それも忘れてしまった。

「誘拐って言うのは冗談だよ。ワトソン君。」

「何言ってるんだよ！お前がワトソンだろうが。」

「そんなわけねえだろ。おれのがパズルもできるし、観察力もあるだろうが！」

「俺のがホームズの性格に合ってるんだよ。」

「でも、ホームズといったら推理じゃないか。俺のがひらめき力があるじゃないか。」

「ひらめきと推理は関係ねーだろーが。お父さんが新聞記者なんだから、俺のが社会の知識がいつぱいあるんだよ。」

「俺だって、次郎からお父さんの話を聞いて社会の知識があるんだよ。」

「……。」

という僕たちの口げんかを止めたのは正太郎だった。

「はいはい分かった。どうせなら二人でホームズやってな。」

正太郎は力も強いので抑えられたら手も足も出ない。しょうがなく今日は朝食を食べることにした。
その時僕の近くの電話が鳴った。

ブルルルルー　ブルルルルー

ガチャ

僕は、怖がりながら受話器をとった。
そこから低い声が聞こえた。

第四話　そして第一の事件＜2＞（後書き）

さて、電話の人の正体は？

さらに京子ちゃんは誘拐なのか。

第五話　そして、第一の事件<3>

その時僕の近くの電話が鳴った。

プルルルル　プルルルル

ガチャ

僕は、怖がりながら受話器をとった。そこから低い声が聞こえた。受話器から車の音が聞こえる。

どうやら外の車の交通が盛んなところからかけているらしい。

「おい。茶木茶木小学校の生徒か？よく聞けよ。京子は預かった。警察を呼んだって無駄だ。取られても、取り返す。分かったか？校長先生にでも連絡すれば取られた時京子を守ってくれるかな。まあとられるようなことはないけどな。」

電話の主がしゃべり始めた。ゆっ、誘拐！僕はびっくりして、

「何だって、お前は誰だ！京子ちゃんは無事なのか？」

と質問する。しかし誘拐犯がそうしゃべるはずはない。

「うるさい！いまいったことをぜったいにつたえておけよ。そうだな。一ついつてやる。京子は無事だ。今言ったこと忘れずにな。ちゃんと先生に伝えろよ。」

「まて！まだ質問に答えてないだろ！」

「俺は話が終わったんでな。」

ガチャッ　プー　プー　プー

僕は受話器を置く。何てことだ。本当に誘拐されていたとは

。僕が大声を出したのでみんなが集まってくる。

「京子ちゃんはぶじなのか？」　だって本当に誘拐さ

れたのか？

という声が聞こえてくる。真太達も近づいてきて僕に聞いてくる。

「まさか本当に、京子ちゃん誘拐されたのか？無事なのか？」

「うん……………」

といってその場にひざを付くぐらいしか僕にできることがなかった。

第五話　そして、第一の事件<3>（後書き）

短くてすみません

第六話 滝川神社で近道発見 そして宝探し始め！<1>

その後は大騒動となった。まず、騒ぎを止めようと先生がきたところに話すとほかの人にも事情がわかってしまって、朝食を食べている場合じゃなくなった。食べたい人は食べてもいいことになったので、僕は急いで食べて部屋で待機していると、警察や校長先生などが来た。僕は休んでいる間に今日の予定を見た。

『九時 滝川探検 滝川山を探検しよう！』

十時 自然のメモ 滝川山を探検して見たり聞いたりした自然のことをメモしよう。

(終わったら)

自由時間 トランプなどで遊んでよう

十二時 昼食 ご飯や魚

十四時 自由時間 滝川探検にもう一回行ってもいいです。なんでもしていてもいいですよ。

十五時 草むしり 畑の草むしりをしよう

十八時 風呂 昨日と同じ順番で

十九時 夕食 おにぎりやから揚げ

二十一時 就寝 明日の朝は早いので気をつけよう

『

というのは、表のスケジュール。実は、生徒でスケジュールを書いているところがある。それが、通称裏のスケジュール、先生にはもちろん他の班の生徒にも教えてはいけない。

僕たちの班にももちろん裏のスケジュールはある。これがその後だ。『二十三時 枕投げ 起きなかつたら集中攻撃

一時 秘密の話

二時 ほんとの就寝

』

というわけだ。

とりあえず八時になった。するとノックの音がする。僕は

「ちょっと待ってください！」

と言ってリュックなどをはじに寄せた。布団は洗濯をする場所へおいてきたので、今は後二人は入れる。

僕はドアのほうに近づいてドアを開けようとしたすると、さっきから顔が青くなっていた角田と次郎がもつと青くなったような気がした。

そんなことは気にせずに、

「どうぞ入ってください。」

と言ってドアを開けた。開けて見るとスーツをピシッと着こなしたカッコいい人がいた。僕が中で話そうと部屋の中へ入れようとする

と、正太郎が歩いてきて

「おっさん誰ですか？」

と聞いた。

「お、おっさん！」

と、その人が引く。でもすぐ真顔に戻って、ポケットから何かを見

せていつてきた

「はじめまして、私は真

京太郎と言います。職業は警視庁の警部

補です。」

何とその人が見せてきたのは警察手帳だった。本より運動が好きな

正太郎と、あまり本を読まない角田は、

別に驚きもしなかったがお父さんが新聞記者で仕事の話をいつも聞

いている僕と次郎、

そしてその話を聞いていて本も読んでいる真太は目を丸くして驚い

た。

何で、ただの誘拐に警視庁の警部補がくるんだ？正太郎も僕たちの説明を聞いて部屋の中で話を聞くことになった。真警部補は口を開いた。

「おい！誘拐犯人から電話をかけられたというのはだれだ！」

「ぼくです。」

正直に答える。最初は怖い人かと思ったけど結構やさしそうだ。で

も、すぐ拳銃を発砲しそう。

そういえば、この人に一番合いそうな言葉があったような気がする。
……あつ、思い出した。

あぶない刑事だったつけ。そういえば『まだまだあぶない刑事』って言う映画もあったんだつけ。

まあそれは置いて、そのあぶない刑事が僕に質問をしてきた。

「君、名前は？」

「尾島健次です。」

その言葉を言ったとき、刑事さんが妙な顔をした。そして真顔に戻り

「君、お父さんの名前はなんと言っのかな？」

「尾島健也ですけど……。」

「そうか……。」

すると、また妙な顔をした。でも、今度のは、懐かしいっていう感じだ。

でも、そのあとは、もうそんな顔はせずにとんどん質問をしてきた。

「電話の内容を思い出して言ってください！」

とか、

「電話をかけてきた相手の声の感じは？」

とか、

「かけてきた人に心当たりはあるか？」

とかとんどん質問してきた。そして、質問攻めにされて九時になったので、やっと開放された。

第七話 滝川神社で近道発見！そして、宝探し始め！<2>

次のスケジュールを思い出してみる。

たしか、

『九時 滝川探検 滝川山を探検しよう！』

だったはずだ。とりあえず外に班で並ぶ。

そして、説明を聞く。一組の先生をやっている、恵子先生が説明をする。

「まず、班長にこの赤いカードを配ります。班長さん。手を上げてください。」

僕が班長だ。

手を上げると、近くの先生が赤いカードをくれた。

そのカードには、

第一チェックポイントとか、第二チェックポイントとか書いてあった。

そして、隣にその説明らしきものが書いてあった。

第一チェックポイント

じゃんけんで、買ったらあめがもらえるよ。写真も撮ってもらおう

第二チェックポイント

川原にいる先生にしゃしんをとってもらってね。

第三チェックポイント

班長が引いた九九の段を一人ずつ言おう。まちがえたらさいしょから。

という感じた。すると、先生が説明を再開した。

「みなさん、班長のカードをよく見てください。チェックポイントなどの説明がかかれていますね。」

それでは今から地図を配ります。今度は副班長！」

副班長の真太に地図が配られる。赤い線が書いてある。見ていると、また先生が説明を再開した。

「よく見てください。赤い線が引いてありますね。ここが歩くルートです。」

まず、ここを出て、まっすぐいくと滝川神社があります。そこが第一チェックポイントです。

そこをでて左に行くと川原があります。そこにいくまでにカメラが置いてあるので、近くにいます先生に、

自分たちの写真を撮ってもらいなさい。それが第二チェックポイントです。

あとは、川原で、このカードに書いてあることをして、この地図の赤い線をたどって帰ってきてください。

ちゃんと方位磁石を見て道を間違えないように。

そして、チェックポイントでやることが終わると、シールがもらえます。

ここに帰ってきたら、しおりを見て何をやるか確かめて、しおりに書いてあることをやってください。

それでは、一分ごとにスタートします。では、一班から進んでください。」

僕は、八班なので最後のほうだ。とりあえず、出発まで待つ。七班が発した。もうそろそろだ。僕たちは立ち始めた。

そして、先生の

「八班、行ってください。」

という声で門に向かって歩き始めた。運動会の行進のときのように歩き始める。手と足を大きく降って歩いていく。

すると、あたりまえだけど滝川神社が見えてきた（見えてこなかったら怖いよ）。僕たちは階段を駆け上がる。

正太郎がどんどん前の人を抜いていく。そして。前の人がよけたところを僕たちも走って駆け抜ける。

足が遅い真太は後ろで、ちよつとずつ歩いてくる。僕たちは班長から一人ずつ、

先回りをしていた咲先生とじゃんけんをしていく。

結果、僕と真太と正太郎は勝ててあめがもらえた。しかしそれ以外はすぐ負けてしまった。

それで、まずあめをもらえた、僕と真太と正太郎で写真を人数分、つまり三枚撮った。

そして、負けた人も入って十枚とった。そして、下に下りようとする。すると、チラツと鳥居が見えた。

僕はみんなを誘ってお参りに行く。ほかの班の人も気付いてお参りにきた。

すると、またチラツと道が見えた。近づいてみると階段があつたので、

これは近道だな

と思って

「おーいここに近道があるぞ！」

と皆を呼んだ。しかし、近道だと思つ前に不思議に思つべきだった。ちゃんと僕たちが上つてきた階段があるのになんで、

こんなところに階段があるのだろう。そして、なんでこんな誰にも見つかりそうにない場所が、

階段が見えるようになっていて、草が伸びてないのだろうと。

しかしもう遅い、皆も近づいて来る。それに、僕はそんなところを歩いてみたいと言う好奇心で

そんなことは思いもしなかったからだ。だから、皆を呼んだ。皆も、そんなことを思つてない。

そして、この道を見たときの皆の意見は三つに分かれた。一つは、近道だから行こうという意見で、

「絶対に近道だよ。だって先生行っちゃだめだって言つてないじゃん。」

と言つてきた。二つ目は行かないほうがいいと言う意見で

「もしかしたら遠回りかもよ。それに、ぜったいにあの道につくなんて保証なんてないじゃん。」

と言つてきた。最後はとにかく行きたいと言う意見で、

「滝川探検なんだから、探検してみようよ。」

と言ってきた。すると、どんだんとかく行きたいと言う人が来て、行ってみるようになった。

ひとりは、出てきそうなところに行つてそこで待っていて、一人はそこを通ることになった。

そこを通る人は僕になったので代表して歩いていく。とりあえず、急いで歩いていく。

階段を下つていくと結構急だった。でも、段はついていたので転ばないように気を付けながら歩いていく。

道がちよつとまがつている。大きいブーメランのような形だ。光が見えてきたので歩いていく。

すると、道は二手に分かれていた。立て札が書いてあるがよく読めない。一つは

『 神社跡』

と書いてある。空白の場所は薄れて見えない。もしかしたら滝川神社なのかもしれない。

と思つて僕はそう書いてある場所へ向かった。僕はスタコラサッサと歩いていく。

そして、僕は忘れていた。滝川神社はちゃんとお参りできているので『跡』じゃないことを。

もう一つ僕は気付いてないことがあつた、それは、微妙に僕が向かつている方向から物音が聞こえていることを。

しかしもう遅い、僕は歩き始めている。引き返しても皆に馬鹿にされるだろう。

そして、僕はそこに着いた。僕は、大声で「誰かいますかあ！」

と言つた。すると、さっきの物音が一段と大きくなった。そこで、僕はもう逃げ出していた。

もう、僕には勇氣は残っていなかった。僕は分かれ道まで走つていき、そこで、さっきと違うほうに曲がる。

せめて、意気地なしとは言われたくないのでここだけは確かめる。
さっと突き抜けると、そこでは真太が待っていた。

僕は真太と一緒に皆がまつている場所へ向かう。そこでは人数が増えた皆が待っていた。僕は、皆に

「あのね、あそこに行ったら。」。」

といっしょに話した。僕への皆の反応はさまざまだった。驚く人もいれば笑う人もいる。

しかし、次郎と角田は青い顔をしていた。と言うわけで、僕の探検少年時代は終わったのだった。

そして、僕は次のチェックポイントへ向かってく。そのときも僕は気づいてないことがあった。

僕達が去る後ろで何者かがあの近道から僕達を除いていることを。

僕達八班は次のチェックポイントへ行く。とにかく、先生に写真を撮ってもらはずなので、

先生が立っているところをよく探す。よく探すと国先生の所にあった。国先生に頼んで写真を撮ってもらう。

とりあえず第二チェックポイント通過！よく見てみると、先生のシールがぜんぜん減ってない。

どうやら、みんな分かんかったようだ。僕は

「先生のシール見るよ！ぜんぜん減ってないぞ。もしかしたらみんな、分かんなかったのかもよ。」

「マジで！じゃあ、一番乗りは俺たちだな！」

正太郎が、うれしがっている。すると国先生が言った。

「おい！それは間違っているぞ。実はほかにもカメラがおいである場所があるんだ。」

もしかしたら皆そこで撮っているのかもよ！」

「マジかよ。でも、そうだったらやばいよ！みんな急げ！」

正太郎が僕達を置いて川原に向かおうとする。

「ちよっと待つてよ。別に競争しているわけじゃないでしょ。」

それに、僕達が近道を見つけたとか騒いでいたから僕より後ろの二班はずっと見ていたでしょ。

それに前の班の人も騒ぎを聞いて、二つの班が来てたんだから。それに途中で三つは班を抜かしたんだから今三番目ぐらいだよ。

川原に行つてからでも十分抜かせるつて、もしかしたら二つの班の人達、案外算数が苦手なのかもよ。

全員言うのが目標だから、一人でも算数の苦手の人がいたら、楽に抜かせるかもよ。」

と真太が論理的に走らないでいいということを話す。でも、正太郎は真太の言う事を聞かずに飛び出した。

僕達はしょうがなく正太郎を追いかけて川原に向かう。真太の言うとおり川原では前の二班が九九と悪戦苦闘していた。

外では人に九九を教えないように先生が見張っているし、倉庫の中なので周りからの声も聞こえない。

だから、同じ班の人には、九九の段ぐらいいしか教えちゃだめだし、もし誰かが人に答えを教えたら、

もう一回代表者が、カードを引くところからだ。一班も二班も五とか二とか簡単な問題が出ないので、大変そうだ。

幸いにも、僕の班には九九の苦手な人がいないので、すぐ終わると思う。

第八話 滝川神社で近道発見！そして、宝探し始め！<3>

とりあえず、開いている場所へ行って代表者の僕がカードを引く。すると、出たのは五の段だった。

いきなり簡単なのを引いたので僕はすぐ言ってしまった。

そして倉庫から出て、次の真太へ段を伝える。真太もすぐ終わって入ってから一分もたないうちに出てきてしまった。

そして、僕が角田へ段を伝えて、女子もやり、やっと最後から二番目の正太郎になったとき、

一班の人が帰ろうとしている事に気づいた。正太郎も、真太に教わった成果が出たのかすぐ終わった。

最後は、真太よりちょっと頭が悪い、次郎だったので真太と同じように出てきた。

皆に一班のことを知らせると正太郎が急いで走ろうとしている。僕達も走る準備のためにアキレス腱を念入りにやる。

そして、僕がスタートの合図をする

「よいドン！」

みんないっせいに走り出す。やっぱり一位は正太郎だ。どんどん走り出す。

すると、一班が見えてきた。一班は気づかないのか歩いている。そして、一班を抜かした。

一班もやつと気づいたのか走り出す。しかし、もう遅い。全員一班を抜かしている。

とりあえず最期まで全力疾走だ。その時、誰かが追い上げてきた。正太郎の次に足が速い進君だ。

正太郎は手加減しているのかちょっとあるき気味だ。みんなが

「おい。正太郎！走れ！」

と応援する。正太郎も気付いたようだ。軽く走り始める。門が見えてきた。

今のところ進が勝っているのか？今、二人が並んでいる。

だけど、正太郎のほうが余裕がありそうで、息も乱れてない。あと三十メートルぐらいだ。その時、

「再スタート！」

と正太郎が叫んだ。そのとたん、足が速くなった。進も、スピードを上げようとするが全然あがらない。

とうとう正太郎が門を通った。僕は、門を通ると正太郎に聞いた。

「ねえ、なんで再スタート！て叫んだの？」

「ああ、そのことか。俺がパソコンやっていたらクリックをしてキャラクターを走らせるゲームがあつたんだ。

早くクリックをするとキャラクターのスタミナがなくなるから早くクリックしすぎてすぐスタミナが切れるんだ。

それでやけになって、いろんなところをしていたら、いろんな変な言葉が出てきてさ。

そこに再スタートっていう言葉があつたから押してみたら、スタミナも回復をして最初からになったんだ。

最初からになること以外は、いいことづくしだしさ。スタミナ回復するから現実で再スタートできたらいいなあって

思っていたら再スタートが口癖になって、しかもその言葉を言うとなんか気合が出るんだ。

だから、走るときとかで気合を入れて、本気で走らなきゃいけないときは再スタートって叫ぶことにしているんだ。」

なるほど、そういうことか。再スタートという言葉で気合を出す。

よし！僕も、そういう時は再スタートって言言葉じゃないけど、そういう言葉を言うことにしてみるか。

まあいいや。とりあえず次の事やるか。みんながしおりをめくって何をやるか調べている。

でも僕は覚えている。確か、自然のメモだったはずだ。しおりの最後のページにメモをする。

僕はしおりを取り出すと、急いで書いた。自由時間で遊びたいから

だ。五つか六つメモをすると、

トランプの準備をする。この前覚えたマジックをする準備をする。みんなが戻ってきた。

僕がマジックをしてトリックを当てるゲームをした。それが終わって、ばば抜きをしようとしたとき、

ノックの音がした。なんだろうと思ってあけて見ると、そこには真警部補が怒っていた。

忘れていた、まだ真警部補に全部話してなかった。僕は、知っていることを真警部補に全部話す。

やっとおわたたらみんなばば抜きに飽きていた。僕はリュックサックをいじっていて、新しいゲームを思いついた。

みんなに提案する。

「おい！この方位磁石を見て面白いゲームが思いついたぞ。」

みんなが集まってきたのでみんなにルール説明をする。

「これは針がない中の板のような物が回る卵形の方位磁石だろ！それで、水平にしないで、

卵の先を北に勘であわせてみるんだ。最初の人是不利になるから二回やる。」

それで北が卵の先にぴったりあつたら勝ちって言うゲームだよ！みんなやる？」

みんなやるという声が広がってくる。よし！ゲームスタートだ。まず、正太郎があわせる。

適当にやったので南のほうに卵の先が向いている。もう一回やったが、ほとんど近づかない。

こういうことを繰り返して、やっと僕の番になった。大体分かったので、思ったほうに向けてみる。

なんとそこで僕の北がぴったりあつた。

「やったー！僕の勝ちだ！」

僕がうれしかった。するとちょうど、いいようにチャイムが鳴った。次は昼食の時間だ。僕達は

「朝食食べすぎ超ショック！昼食食べずに中ショック！夜食も食べすぎややショック！」

というダジャレをいいながら食堂へ向かう。昼食を食べるときも言っている先生に

「そうか。昼食食えないのか。じゃあ昼食抜きにしてやるから中ショックっていつてなさい。」

と冗談を言ってお弁当をとってきたので僕は

「今おなかagusごく減っています。今抜かされたら中ショックどころじゃなくなってしまう。」

といって、お弁当を返してもらった。そして、すごい勢いで昼食を食べていく。すると腹が痛くなっていた。

みんなが笑いながら

「ハハハッ、これじゃあ昼食食べすぎ中ショックじゃん。」

と言ってきた。本当にそうなっている。僕は言い返すこともできずに部屋に戻っていった。

そして、とうとう自由時間になった。

僕達の腹の痛さも納まると、話し合いになった。真太が言った。

「これからなにやる？」

正太郎が手を上げた。

「滝川神社の音の正体を暴きに行く。」

正太郎は力が強いのでみんな逆らえない。しょうがなく滝川神社へ向かう。近道に入り、

『 神社跡 』

の立て札があるところまで向かう。しかし、そこでは音などしなかった。もちろん神社の中には誰もいなかった。

そして何の成果もないまま滝川荘へ向かう。その時、たくさんの車が目の前を走っていた。

その時、僕は警部補に話していないことがあったのを思い出した。そして、物音の正体も分かったのだった。

「まったくあぶねえ車だなあ。そう思うだる健次」

「・・・・・・・・」

「おい！返事しろ！健次。」

「・・・・・・・・んっ、何だっけ。」

「危ないと思うだる健次。」

「あっ、そっそうだね。」

「お前ちゃんと人の話し聞いているのか？」

「聞いているって、あの真警部補は危ないって話だろ。」

「確かに危ないな・・・・・・・・ってその危ないじゃねえよ。車が危ないって話だよ！やっぱり聞いてねえじゃん、お前。」

「あっ、ごめんごめん。なんか考え事していてさ。」

正太郎ともろくに話ができなかった。ある事実に気づいてしまったからだ。僕はみんなに

「みんな急いで、大変なことが分かったんだ。」

と言つて滝川荘へ急ぐ。早く真警部補にあつてこのことを伝えなければ。みんなも追いついてきた。正太郎が聞いてくる。

「どうしたんだよ。ある事実ってなんなんだ。」

「そのことはちよつと待って、真警部補に聞かせてから話すから。」

と言つて、真警部補のところに急ぐ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6480a/>

山頂の事件

2010年10月10日03時15分発行